

大慈悲を感じよう

相川大輔

先日、『奇蹟がくれた数式』と題する、三十二歳で夭折したインド人の天才数学者ラマヌジャン（一八八七〜一九二〇）の伝記映画を観た。

ラマヌジャンは、貧しいバラモンの家に生まれながらも、独学で数学を学び、その成果をケンブリッジ大学の数学者ハーデイに書簡で送った。ハーデイはラマヌジャンの天才的才能を直観的に見抜き、彼をケンブリッジ大学へ招聘する。このハーデイとの出会いが、人種差別や第一次世界大戦下という困難に見舞われながらも、彼が世界の数学界で活躍する場を得る契機となる。

ラマヌジャンの才能は、よくアインシュタインの才能と比較される。アインシュタインの発見は彼が発見し

なくても遅かれ誰かが発見していたであろうものであるが、ラマヌジャンの発見した公式は到底、他の人間には発見することができないものだということだ。

映画の中でハーデイがラマヌジャンに、いったいどういったやり方で公式発見の着想を得るのかを聞くが、彼は「眠る時や祈る時、ナマギーリ女神が舌の上に置いていく」と答えている。彼のこの発言からも、彼のこの数学的着想は、アインシュタインやハーデイのような伝統的正統的学問を土台とするものとは異なり、宇宙の法則をダイレクトに感受するような直観的なものであることがわかる。

ナマギーリ女神というのは、バラモンの神であり、彼は発見した公式を神々の「贈り物」「慈悲」だと考えていたと思われる。

映画の中でも、彼は無神論者で信仰をもたないハー

昨年十一月一日より開設された寒巻百日の大荒行堂も、折り返し地点を越えた。百日という長いと感じるか短く感じるか。四度目の修行中の副住職はどう感じているのか。百日間といっても、一日一日、一瞬一瞬の積み重ねである。今という時間は再び戻って

☆☆☆☆星のたより☆☆☆☆

くることはない。たとえば同じ日の出でも、「初日の出」となると特別感がある。しかし二日目の日の出もまたその日限りのものだ。一年を通して、繰り返しの日々が続くのではないかと心得て、新たな年を、一日一日大切に生きていきたい。
K.J

デイに対して、「神の御心でなかったら方程式など何の意味もない」と述べている。おそらくラマヌジャンは言うなれば、久遠の仏の大慈悲の御心を、神々を通じて感じていたのだろう。

俳壇 (みのり)

七五三繩の張られし御堂いよよ寂ぶ
 来る年の幸を祈らん除夜の鐘
 雲一つなき初御空鷹の舞ふ
 簞目はさまめの立ちし寺苑や初詣
 お年玉子等の喜び満たされて

法華経茶話

長者窮子喩 (二)

この喩えは、先の三車火宅の喩えを受けた高弟達が、自分達の理解をお釈迦様に告白するという形をとっています。つまり高弟達が語り手になっていくのです。この喩え話では長者をお釈迦様、財産を仏の無限の智慧、息子を我々凡夫に喩えています。高弟達は仏の教えを聞いてその内容を理解していましたが、それは自分とは無縁のものだと考え、自分を卑下していました(智慧の管理人)。しかし長者の言葉により、息子は財産の管理人から相続人に転じます。それと同様に高弟達も仏の智慧の管理人から相続人へと転じたのです。つまり高弟達はお釈迦様の、仏の智慧は悉くあなた達のものになるといふ言葉で、自分達には元々仏になるための資質が備わっていたのだと理解できました、とお釈迦様に告白したのです。